

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

70年をつなぐモノ：蔚山コレクション

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朝倉, 敏夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4562

紀行

70年をつなぐモノ

——蔚山コレクション



1930年代 蔚山の中心部「太和樓」。(ソウル大学校博物館所蔵)



姜鋌澤先生生誕 100周年記念論文集出版記念会での李文雄先生。



1930年代の蔚山の定期市場。(ソウル大学校博物館所蔵)

5月9日、私は韓国国立民俗博物館（以下、ソウル民博）の張庠教さんと姜旻杓さんに会い、韓国南東部に位置する蔚山広域市（以下、蔚山市）に行った。蔚山市は韓国の財閥企業である現代グループの本拠地であり、クジラの町としても知られている。日本からは釜山の郊外にある金海空港に降り、直行バスで1時間の距離である。

彼らと会うのは、今回2回目である。1回目は本館とソウル民博と蔚山市の三者が「蔚山達里100年プロジェクト」という学術交流協定を結ぶため、松園前館長と2月に一緒に行った時である。今回は、その一環として、私がこの夏に計画している蔚山市での民俗調査の予備調査のためである。

蔚山コレクション

さて、私の計画している民俗調査について話すには、まず20余年前の出来事から話さなければならぬ。

私は1988年4月から、民博に勤めはじめた。その時、韓国から外来研究員として民博に来られていたソウル大学人類学科の李文雄教授と会った。李先生は、大阪の在日韓国人の人類学的研究のため、1988年の1月から民博に来られていた。李先生は、ご自身の故郷が蔚山市であり、民博の収蔵庫に「蔚山コレクション」を発見したと熱く話された。

「蔚山コレクション」とは、1936年に蔚山達里で収集された生活道具である。李先生は、故郷の文化院の機関誌『蔚山文化』10輯（1994年）に、このコレクションがどんなもので、どうして民博にあるかを調べ、投稿した。この原稿は私が翻訳したものが、『民博通信』73号（1996年）に掲載されているので、ここでは詳しくは述べないが、李先生は、このコレクションが蔚山達里で収集された背景は、朝鮮農村社会衛生調査会が編集した『朝鮮の農村衛生——慶尚南道達里の社会衛生的調査』（岩波書店、1940年）に書かれてあり、この調査をする契機を用意した立役者に姜鋌澤という人物がいることを明らかにした。姜鋌澤

「蔚山達里100年プロジェクト」の調印式。



は当時、渋沢敬三の支援を受けて東京大学で農業経済学を学び、第2次大戦終戦後は京城大学の教授、第2代の農林部次官を歴任したが、朝鮮戦争の折に北朝鮮に行き、その後の消息は不明とのことである。李先生は、姜鋌澤の論文を翻訳するとともに、その生涯と学問

世界を描きだし、2008年に姜鋌澤の生誕100周年を記念した論文集『植民地朝鮮の農村社会と農業経済』（YBM Si-sa）を刊行した。

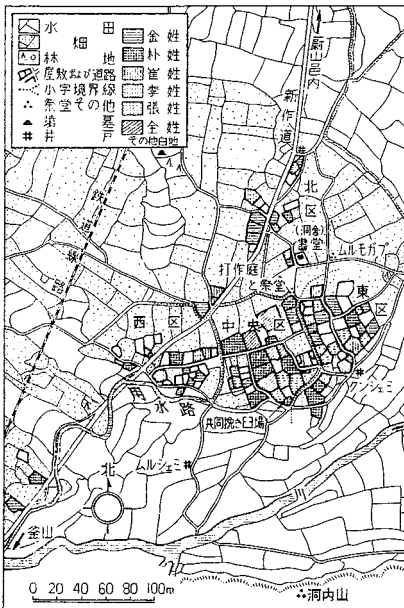
李先生のこうした研究をふまえて、ソウル民博では、『朝鮮の農村衛生』を韓国語に翻訳・刊行するとともに、「蔚山コレクション」の図録である『郷愁——1936年蔚山達里』も刊行した。そして、民博との交流協定にもとづく事業として、蔚山市を加え、2009年から3年計画で「蔚山達里100年プロジェクト」を立ちあげた。このプロジェクトは2009年に蔚山の民俗調査をおこない、2010年に『蔚山民俗誌』の刊行とドキュメンタリー映像を制作し、2011年に蔚山市立博物館の開館にあわせて特別展を開催するというものである。

フィールドワークの基地

私が蔚山市に着くと、ふたりは私を昔ながらの「茶房」に案内してくれた。茶房とは、今風にいえばコーヒー・ショップであるが、マダムとアガシ（未婚の女性を指す語）がおり、お茶を飲みながら、彼女たちと話をしたり、将棋や囲碁をさしたりすることのできる老人男性たちの社交場である。30代にもなっていない姜さんはもちろん、40代になったばかりの張さんにも、茶房はあまり似合わない。

「私のために、わざわざ茶房に？」と冗談まじりに私が言うと、「私たちは、お年寄りたちと話すのに、よくここに来るので、すっかり店の人もなじみになりました」と張さんが答えた。韓国でのフィールド・ワークでは、茶房が基地となる。

彼らは1月20日から、かつては達里といわれた蔚山市の達洞で2DKのアパートを借りて調査をしている。期間はこの10月中旬までの



達里の地図。(小川徹論文より)

予定である。こうした現地長期滞在調査は、ソウル民博と韓国土地公社が共同で遂行した行政中心複合都市建設予定地域の「人類・民俗分野文化遺産指標調査」がきっかけとなった。この調査は2005年9月から2006年12月まで14カ月かけたが、この時に数回に分けて短期滞在調査を実施する従来の方法の限界を克服しようと、長期滞在調査の必要性が議論され、試みられたという。

現在、ソウル民博の民俗研究課は2つの長期滞在調査を推進しているという。ひとつは「地域民俗文化の年」と連携させ、行政区域の中で、その年に特定された「道」（日本の県にあたる）の民俗文化が顕著な2つの地域を選定し「地域民俗調査」をおこなっている。2007年は全羅北道、2008年は慶尚北道、2009年は忠清南道のそれぞれ2つのムラを調査している。もうひとつが「都市民俗調査」

である。2007年のソウル市阿峴洞、2008年のソウル市貞陵洞に続いて、今回の蔚山市達洞が3回目である。阿峴洞の調査は、すでに報告書が刊行されている。現地調査のチームは、2、3人で構成され、写真家や動画の撮影隊も加わるといふ。

夕方、張さんと姜さんは、私をクジラ料理の店に案内してくれた。「ここは、地元の人しか知らない店なんですよ。」ふたりは、蔚山に来てから、つい1週間前まで4カ月余り、毎食を外食で過ごしてきたという。「だから、蔚山の食堂はずいぶんと詳しくなりました。さすがに今は外食に飽きたので、生ゴミの出ないような料理ですが、自炊をするようになりました」と笑いながら長期調査の苦勞話してくれた。私は、彼らの調査の体験談とさまざまなクジラの部位を肴に焼酎を飲んだ。

飲んでいて気づいたのは、11歳違いのふたりの相性がよいことだ。姜さんは張さんを立て、張さんは姜さんを見守りながら、うまく導いている。とても微笑ましい。「どうしてふたりが蔚山市に来ることになったの？」と尋ねてみた。張さんは、「出身が蔚山市と同じ慶尚道だからでしょうか」と答えた。彼は慶尚北道にある安東大学で民俗学を専攻。1994年からソウル民博の研究員となり、その後、2002年に同大学で修士課程を終えて、現在は学芸研究士である。結婚をしており、月に1度、博物館に報告をしにソウルにあがるとき、奥さんに会うという。姜さんは全羅道にある全北大学で人類学を専攻。現在同大学の考古文化人類学科博士課程に在学中だが、1月19日にソウル民博の研究員の発令を受けて、その翌日から蔚山に来ることになったという。「どうしてここに来たか、わかりませんが、こ

こもいいですよ」と笑う。ふたりとも、学部時代から調査経験を積んできたためか、気負いもなく、たんとと調査を進めているようだ。

ソウル民博では、このように研究者を毎年2、3人ずつ何か所かのフィールド・ワークに出して研究成果をあげている。「ソウル民博は、なかなかやるな」と思う。

70年後の達里

翌朝は、牡蠣雑炊の専門店に連れて行ってもらった。そして、張さんと姜さんに案内してもらって、かつての達里を見て回った。

70年前の達里については、洪沢敬三のアチック・ミュージアム員として、前述の『朝鮮の農村衛生』の調査に同行した小川徹が「南朝鮮の一農村における村落生活と民具について——1936年慶尚南道蔚山達里調査個人報告」（『民族学研究』21(4)：43-53、1957年）に、達里集落の人文地図を描いている。小川は「集落は東方に突出する標高10m以下の丘陵性台地の南斜面に乗っている。図の東方は一望数kmの水田地帯」と述べているが、現在の達洞は、住宅地と商店街になっており、周囲にビルが建ち並び、水田は一切見られない。当時の地図にはないが、1942年に開校したという江南初等学校は、背後に建った、富裕層が住む高層アパートに見下ろされている。

小川が「打作庭、祭堂、書堂、井戸の配置のうち、南朝鮮農村集落の特色が見出され」と述べているが、打作庭はなく、祭堂のあったところには個人の住宅が建ち、書堂は敬老堂（老人会館）に変わり、井戸のあったところにはロッテ・マートが建っている。今や農村集落ではなく、都市に変貌している。張さんによると、蔚山は1960年代から工業化が始



大衆消費社会の象徴 大型マート。



小学校を見下ろす高層アパート。



「達里美容院」の看板。奥には高層アパート団地。

まり、外地から多くの転入者があり、宅地開発が急速に進んだという。また、1995年度から高層アパートが林立しはじめ、町の景観が大きく変わったという。

それでも達里というかつての名前のついた理容店が残されている。町を歩き回ると、昔ながらの路地がわずかではあるが残っている。その路地に入ったところに、現在86歳になるひとりのお年寄りが住んでいる。この人だけが、1936年の調査のことをわずかに記憶しているという。

張さんと姜さんの調査は、インフォーマントを探すことから始まったという。蔚山市は工業化・都市化が高度に進み、若年の工業就労者が多く、全国でも居住者の平均年齢が低い地域のひとつである。また、外地からの転



張さん(左)と姜さん。

入者が多く、代々この地に住んでいる人が少ない。そのため、さまざまな縁故をさがして、さまざまな集まりが作られているという。そうした会合に参加して話を聞こうとすると、まずは酒が勧められ、酒を飲まなければ話をしないと云われ、酒量が増えてしまったと張さんの言。

現在の達洞は、約1万1000戸、人口4万人であるが、代々達里に住んできたお年寄りは13人しかいないという。そのうちに蔚山市でかつての地名を調査していた南区の文化院の助けを得て、市内に住む達里生まれの人を紹介してもらったり、蔚山大学に行き達里出身の学生から話を聞いたりして、インフォーマントの数を増やしていったという。都市民俗調査の難しさは、住民の移動が多く、インフォーマントをみつけにくい点にあるのだろう。

達里と達洞を結ぶモノ

70年前の達里と現在の達洞をどう結びつけたらよいのだろう。景観も変わり、ヒトのつながりも、すべてを追跡することはむずかしい。ことにソウル民博の研究者のように、長期に滞在して調査することはできない。私は、この夏にどのような調査計画をたてるか考えた。結論は、ひとつであった。モノを通して調査しよう。

モノ、すなわち民博にある「蔚山コレクション」である。その資料数は128点である。

小川の論文にも達里民具のリストが載せられているが、その図録がソウル民博によってすでに作成されている。これらのモノが、いつまで使われていたのか、いつから、どのような民具にとってかわったのか、それらを調査することで、70年前の蔚山達里の生活が現在まで、どのように変化してきたのかを描くことができるのではないだろうか。

この日は、達洞だけでなく、車で蔚山市内を巡見し、南区の文化院も訪問した。黄昏時になり、張さんと姜さんは、「お疲れでしょう」と、私を蔚山市の郊外にある麗海ムラにある居酒屋に連れて行ってくれた。テジコプテギ(ブタの皮の部位を炒めたもの)、トットリムッ(そば粉で作った寒天状のもの)、パジョン(ワケギのお好み焼き)を肴に、蔚山市で作られている「テファル」というマッコリ(濁酒)を、一度やかんに入れてから杯に注いで飲んでいると、ずっと昔に長期間フィールドに入っていた時のことを思い出した。

翌朝は牛肉の雑炊を食べてから、蔚山市文化芸術課の申衡錫さんと打ち合わせをし、昼には80年、4代続くビビンバの店に行った。次に来る時には、どんな美味しいものが待っているだろう。そんな期待もしながら、張さんと姜さんとのまたの再会を楽しみにして、3日間の予備調査を終えて帰ってきた。



あさくら としお

民族社会研究部教授
専門は韓国社会論
著書に、『世界の食文化① 韓国』(農文協 2005年)、
『くらべてみよう! 日本と世界の食べ物と文化』(共著 講談社 2004年)、『日本の焼肉 韓国の刺身』(農文協 1994年) など